



昭和39年(1964年)の東京オリンピックとは大きく異なる大会となっています。時代、世界情勢も背景も当時とは違っていますから当然です。今回の大会は人々にどのように記憶されるでしょうか。

ワクチン接種も進んできていますが、より一層のご健康をお祈りしています。

旧東方村

中村家の女性たち

久しぶりに小さなパネル展示を行いました。旧東方村中村家住宅での「中村家の女性たち」(7月9~11日)です。その概要をご紹介します。

封建時代の女性の地位

歴史上で活躍した女性について、古代から中世、安土桃山時代までは何人か挙げるができます。特に鎌倉・室町期には北条政子や日野富子は政治権力を持っていましたし、女性の地頭もありました。けれども近世になると女性は当主の後継者を産む役割が中心となっていきました。この傾向は町村の名主層でも同様でした。それは土地や財産を守り受け継いでいくためだけでなく、行政の一端としての社会的役割をも継承して政治機構を存続させていくことでもありました。

そういう状況下、家譜や家系図には当主は肩書や業績が記されても、女性は名前だけ記されることも少なくなく、時には「女」としか記録されないこともありました。

家譜から垣間見える姿

旧東方村中村家には複数の家譜・家系図が残されており、度々家の危機に遭ったことが記録されています。その時の当主はとても辛苦を重ねて家の再興に務めました。その人を支えた女性についての様子も記されています。今回のパネル展示で紹介した女性の内、二人についてここに改めて述べたいと思います。

屋敷と土地を失った時に支えた人

それは18世紀中頃(江戸時代半ば)のことです。当主・智栄の時に家計が著しく悪化して、屋敷と土地を失ってしまい、名主役も務められなくなりました。智栄は人手に渡った土地の隅に小屋を建てて暮らしますが、失意のうちに没してしまいました。長男の智宗は一足先に江戸に出た母(智栄の妻だった人)を頼って行き、代官・久保田十左衛門の手代となって働きました。その後新たに商売を始めて蓄財しました。

江戸に出てから15年後、その女性は亡くなりますが、長男の智宗はその5年後に土地を取り戻し、翌年(安永元年=1772年)妻子を連れて東方村に戻って居宅や蔵を建てました。この家がレイクタウンにある中村家住宅です。



(寄贈前の中村家住宅～江戸時代の状況を残しています。)

名主と教師の夫を支えた人

越谷市立大相模小学校は来年、開校150年目を迎えます。この前身となった学校=培根学校を設立したのは、幕末・明治初期の当主、義徳(義章)でした。この人の先代・興治は跡継ぎの男子に恵まれず、義徳は西袋村(現八潮市)の小澤家から養子として中村家に迎えられました。この数か月前には、保村(現吉川市)から養女を迎

えられた哥（うた）がいて、後年この二人は夫婦となって中村家を継ぎました。

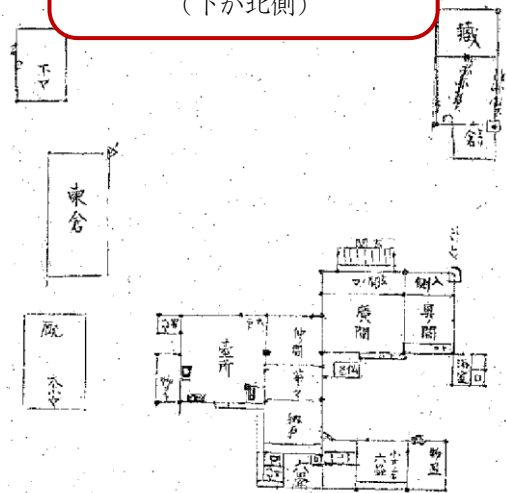
義徳は16歳で相続して名主の仕事をしなが、寺子屋を運営しました。養父の興治は散財して多くの借金をしてしまい、18歳で名主役を引き継いだ長男の治太郎と共に哥は懸命に働いて借財を返しました。この女性なくしては義徳も学校運営が出来なかったかもしれません。

社会の発展を支えた

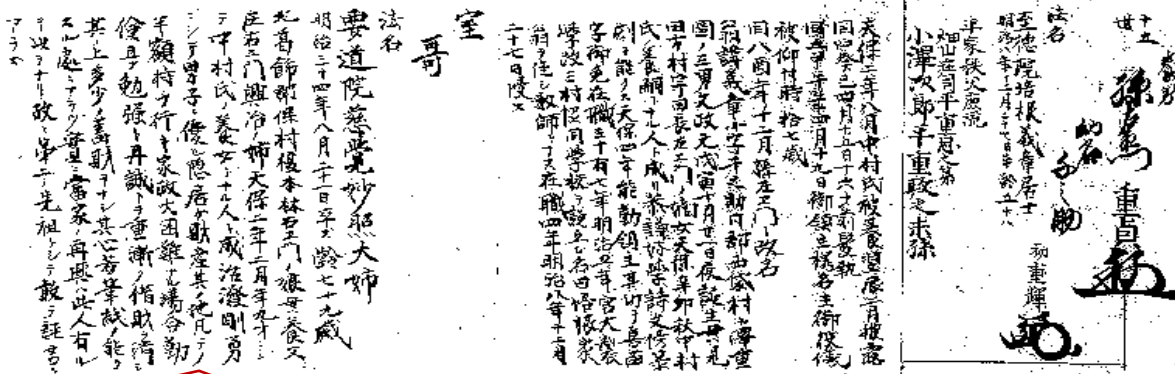
かつての社会では子供の早世も珍しくなく、また跡継ぎの男子が生まれない場合には妻が離縁されることもありました。また家の存続のための再婚も少なくありませんでした。しかし今回の展示のように、平常の時ばかりでなく家の存続が危うくなった時に、女性の果たした役割がとて大きかったことがわかります。哥の例からも、一つの家の存続だけでなく、地域社会の発展も支えていたことを知ることが出来ました。

旧東方村中村家住宅 幕末・明治期の間取り

(下が北側)



中村家の家譜(部分)

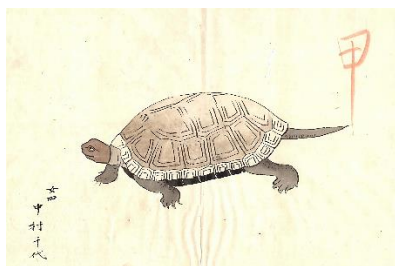


哥:活発、剛勇で、勤儉と丹誠を重ねて借財を返したと記述されています。

重貞(義徳)についての記述

文化の香りをもたらし人

前述した二人の他に、明治から昭和にかけて生きた千代という女性がありました。千代は当時としては進学する人が少なかった高等女学校を受験して教育を受けました。高女4年生(現在の高校1年生に相当)の時に学校で



時代に身につけたものと思われま。

この期間中3日間で300余人の方々のご来館がありました。次号では、7月22日から大間野町旧中村家住宅で行われたパネル展示「市域の火災と人々」の概要をお伝えしたいと思います。

去る7月16日、文化審議会から文部科学大臣に答申があり、大間野町旧中村家住宅が国の登録有形文化財(建造物)に登録される見込みとなりました。当館については「古民家だより」No.31をご参照下さい。

描いた日本画が残されています。画面の中に「甲」と朱筆されていますが、これは担当教師による評定です。現代の通知表では「5」です。

千代はまたしばらく滞在大磯から父親に何度か絵葉書を出しています。その文面からは文学的な素養が感じられます。これも高等女学校時代

